

初級スペイン語クラスにおいて接続法をどう扱うか

TADESKA 12月 担当 三宅陽子

1. 論文要旨 「接続法は何によって決まるか」 福嶋教隆 (1997)

スペイン語の動詞がいかなる要因に基づいて決定されるのかを、「主要部決定」説と「話し手の発話態度決定」説の2つに大別し、実例を用いて優劣を論じている。

I. 「主要部決定」説

•Bosque (1994)

従属動詞が接続法になる要因を、統語的な主要部が決定するという主張。

•Hadlich (1971)

接続法はそれ自体、意味を持たず、外部要素を形態的に反映しているに過ぎないという主張。名詞節では、主動詞の素性により従属動詞に接続法変形が働くとしている。

•Bello (1847)

従属している語や文の影響または支配によって(つまり統語的主要部)従属要素の形を決定するという主張。

II. 「話し手の発話態度決定」説

•Porto Dapena (1993)

叙法の決定要因は必ずしも主要部によるものではなく、話し手の発話態度による場合もあることを主張。

a. Les dije que habías venido. ← Les dije: —Ha venido. <平叙>

b. Te dije que vinieras. ← Te dije: —Ven. <命令>

c. Los periódicos no informan de que {está/ esté} enfermo el Papa.

<発話態度: 内容を話し手が断定(直説法)か、そうでないか(接続法)>

•Gili Gaya (1943)

「話し手の発話態度を表現するのが叙法の機能である」との、メンタリストティックな主張。直説法と接続法の使用域の境界は断絶的ではなく、連続的な推移があるとも述べている。

•Lenz (1929)

「叙法は、論理判断に関する話し手の観点を示す文法範疇である」という主張。

III. 実例の検討

2つの説についてコーパスを用いて検討

1995～1997 年のある1日に発行されたスペイン語の新聞5紙から、動詞(句)に導かれる名詞節(直接目的語節、前置詞の目的語節)の用例を用いている。

直説法の用例のみが得られた動詞は 110、接続法のみ動詞は 35、両叙法の用法が得られる動詞は 16 のみ。しかし結局、この 16 のうち同一の統語環境下で両叙法を従える主動詞は、せいぜい 4 つにとどまり、主動詞がどちらか一方の叙法と結びつく事例が圧倒的に多い。

「主要部決定」説＝主要部と叙法の関係が単一的である事例の説明に適している。

「話し手の発話態度決定」説＝1つの主要部がいずれの叙法をも支配でき、その使い分けによって意味的差異が生じる事例に対処するのにむいている。

したがって、このコーパスから見られる実際の使用状況は明らかに第1の立場にとって有利であり、ごくわずかな事例のみ細則を設けるだけでよい。第2の立場では、両叙法が全ての従属動詞について可能と想定した上で、釈明を大多数の事例に行わなければならなくなる。接続法のような有標の用例は例外として扱った方が言語事実を正しく記述できる。

IV. 結語

コーパスによる事例からは、「主要部決定」説の方が説明に適していることが分かった。ただし主動詞を意味的に類別化し、より一般的な原則を追及する必要があり、結果として「話し手の発話態度決定」説に相当するものに至る可能性もある。

「主要部決定」説＝「いかなる統語的条件下で叙法が選択されるか」つまり叙法選択に係わる要素と従属節の統語的關係を確認する。

「話し手の発話態度決定」説＝文全体にかかる「話し手の気持ち」という、非統語的な要素に叙法選択が委ねられていると見る。

2. 接続法の「主要部決定」説(形式的観点)と、「話し手の発話態度決定」説(意味的観点)の比較 (初級スペイン語授業において、どちらの説が有効か、これら以外の説明方法はあるか、など)

初級文法を学ぶ段階では、例外が少なく形から判断できる「主要部決定」説がわかりやすくいい。ただ「なぜこの主要部のときだけ今まで習った直説法じゃないの？何が違うの？」と思う学生もいるだろうし、まずは接続法になる形を紹介し、一通り覚えた後で「この接続法を使う文章に共通しているのは、話し手の気持ちが係わっているところ」というのを確認すること

が有効かもしれない。

名詞節のように、必ず接続法を用いる説明には「主要部決定」説が適しているが、副詞節や関係節のようにどちらも使える場合には「話し手の発話態度決定」説を紹介することも必要になってくる。授業をするには、このどちらか一方の立場のみで教えるのではなく、両面から説明することが必要となってくる。

3. 学習者は接続法をどう感じるか

(どうすれば難しいイメージを受けず、習得・運用していけるか)

混乱を招く理由には、形式さえ覚えていれば接続法は使えると思って覚えたのに、学習して行くうちにそうでもないパターンがたくさんでてきて、これが混乱を招いていると思う。知らないパターンが出てきても対応できるように、形を紹介するとき共通する意味を伝えた方がいいと思う。難しさ以前に、接続法の文を読んだり口で言ったりする機会が直説法よりも少ないので、初級ではあまり多くはできなりが、次の段階としていろんなパターンの練習問題をするのが有効かもしれない。

複文での接続法を教える前に、ojaláを用いた短文での接続法や命令文を先に授業で扱い、このときに状況設定をしたり、手紙を書く状況を設定する。それにより話し手の心的態度を、学習者も実際に知ることとなるので、接続法には話し手の態度が係わっていることを理解していける手がかりになる。また、単文で練習することにより、接続法の活用を覚えるのにも役に立つ。その後、複文での接続法を学ぶ際にも、この話し手態度についてイメージを掴んでいけば、苦手意識は少なくなるかもしれない。

接続法の用法を紹介するとき、頻度の高いもの(願望や命令などの単文)から教えることも有意義かと思われる。

学習者に接続法の難しいイメージを与えないようにすることも大切だが、接続法は実際に奥が深いものなので、やはり簡単ではないという心構えはさせることも忘れてはいけない点である。

4. 以上をもとに、参加者の方々のご意見や教育経験から有効な授業方法を探る。

これらを踏まえて日本でできそうな方法は、福嶋(2003)にもあるように、まず文法の授業で接続法が現れる形式(「主要部決定」説)をしっかり学び、パターンドリルをする。一方で、会話の授業では仮想の場面を与えて接続法を用いないといけない文章を作らせる、などの方法が考えられる。文法と会話の授業が連動していることが必要になるので、授業を取り巻く環境や条件や教科書、また教師同士の努力がやはり言語学習には大切になってくると思われる。

